

洗髪における看護師と美容師の技術説明の比較

— 言語表現の分析を通して —

蓑田 さゆり¹⁾, 高植 幸子²⁾, 田中 孝子³⁾, 及川 麻衣子⁴⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

2) 椙山女学園大学 看護学部 看護学科

3) 市立四日市病院

4) 山野美容芸術短期大学 美容保健学科

研究報告

洗髪における看護師と美容師の技術説明の比較

— 言語表現の分析を通して —

養田 さゆり¹⁾, 高植 幸子²⁾, 田中 孝子³⁾, 及川 麻衣子⁴⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

2) 椙山女学園大学 看護学部 看護学科

3) 市立四日市病院

4) 山野美容芸術短期大学 美容保健学科

キーワード： 看護師, 美容師, 洗髪, 技術説明, 言語表現, KHCoder

要 旨

〔目的〕

本研究では、看護師と美容師が洗髪技術を言葉で語り、説明したことを比較、分析することによりそれぞれの技術や説明の特徴を明らかにする。また、テキストマイニング手法により、それぞれの言葉やその関連性より、具体的な洗髪方法への示唆を得るとともに、伝承可能な形にし、看護技術教育への向上に寄与できると考えた。

〔方法〕

研究への参加への同意を得られた入院病棟で働く看護師3名、美容院で働く美容師3名を対象とした。各対象者に洗髪実施のビデオ撮影後、その映像を見せながら、洗髪の実施方法、こだわり、留意点などを中心に自由に語ってもらい、逐語記録として内容を整理した。

〔結果・考察〕

洗髪の方法を説明する際、美容師は看護師より実施の根拠、具体的な手の動き、シャワーの使い方など多くの語を用い、説明を行っていた。しかし、美容師が説明する根拠は、経験的に語られている可能性があった。看護師が多くの語を用いて根拠や具体的方法を説明できなかった理由として、臨床現場では診療援助技術への修得に重きがおかれ、洗髪などの指導については十分に行われていない可能性があるため、現状把握する必要がある。リズム・テンポは患者をリラックスさせ副交感神経を優位にさせるため、患者の状態を考慮した速さの検討が必要である。両者は、「後ろ」「耳」「生え際」の洗髪は難しいと認識しており、デモンストレーションなど行う場合、細かな手の動きがわかるように、視覚的な工夫が必要である。また、オノマトペを用いて看護の技術教育への効果的な活用方法への示唆を得た。

I. はじめに

看護業務が複雑・多様化し、患者の安全が重要視されるなかで、看護基礎教育で習得する技術と臨床現場で求められる技術のギャップが指摘されている¹⁾。看護教育で取り上げる看護技術の内容に関心が高まるなか、川島²⁾は、看護技術の教育において看護実践で培われてきた経験知を言語化し伝える必要があり、注意深く観察すれば言語化できる要素の抽出が可能なものは多いとしている。

看護技術には、生活行動援助技術と診療援助技術があり、医療や科学技術が高度化する現代においても生活行動援助技術が患者の安全・安楽に果たす役割は大きく、その経験知を客観的に整理する技術研究は重要である。また、適正な技術は、身体侵襲のない技術として日常生活から安楽を提供できる。生活援助技術の一つである洗髪は頭皮の清潔を保ち、気分を爽やかにし闘病意欲の向上や自信につなげる^{3,4)}。

このような効果のある洗髪に対して、洗髪用具の工夫・開発、洗髪の身体的・心理的効果と評価基準、洗髪の援助方法などさまざまな角度から研究されてきた⁵⁾。実施者の技術で腕の動きと指腹の圧、シャンプー剤の使用量、すすぎに関連した研究⁶⁾、技術教育に関連した内容⁷⁾が報告されている。看護師と美容師を比較した先行研究では、作業姿勢⁸⁾や学生への技術教育に関する⁹⁾ものなどがある。また、佐藤ら¹⁰⁾の看護師と美容師の洗髪技術を生体反応と主観的反応に分け比較した研究では、美容師が行う洗髪は、看護師が行う洗髪に比べて患者の主観的反応から満足度が高いという結果であった。先行研究からは、洗髪技術に関する看護実践における経験知をもとにした研究は少なく、特に看護師と美容師の洗髪技術について半構成的面接を用いて比較する研究はほとんどない。

「洗髪」は、美容界ではシャンプーイングと呼ばれ、美容師と看護師がおこなう洗髪の対象に違いはあるが、頭皮の皮脂、フケ、埃などの汚れを取り除き生理機能を高めるといふことにおいては共通する技術であると言える。美容師の洗髪は日々何度となく繰り返され、看護師が行う洗髪は回数より非常に多く、顧客を対象としていることから癒

しの効果や質の高い技術が要求される。そのため、美容師の学校で使用されているテキスト「美容技術理論」¹¹⁾ではシャンプーイングの目的、頭皮・毛髪の汚れ、メカニズム、特に方法については看護技術のテキストより詳細に記述されている。

本研究では、看護師と美容師が洗髪技術を言葉で語り、説明したことを比較、分析することによりそれぞれの技術や説明の特徴を明らかにすることを目的とした。テキストマイニング手法により、それぞれの言葉やその関連性を視える形にすることにより、具体的な洗髪方法への示唆を得るとともに、伝承可能な形にし、看護技術教育への向上に寄与できると考えた。

II. 研究方法

1. データ収集期間

1) 研究期間

平成 22 年 3 月～平成 23 年 1 月

2. 研究対象者

本研究への参加に同意の得られた入院病棟で働く看護師 3 名、美容院で働く美容師 3 名を対象とした。

3. 方 法

1) 研究対象者の選考方法

研究協力に対して、看護師と美容師のそれぞれの経験年数を 5 年、10 年、15 年程度で選考の依頼をした。看護師は看護師経験 5 年、13 年、21 年ではほぼ依頼にそった対象者であったが、美容師は美容院閉店後の研究となったため、経験年数を揃えることに困難を要し、美容師経験 7 年、23 年、29 年となった。また、美容師は美容師国家資格取得以前から美容院で見習いとして働き、洗髪を行っているケースが多いため、洗髪を実際に行っていた経験年数についても確認した。(表 1)

表 1 看護師、美容師の概要

看護師	年齢（歳）	性別	看護師 経験年数	美容師	年齢（歳）	性別	美容師 経験年数	顧客への 洗髪経験
A	26歳	女性	5年	D	32	男性	7年	11年
B	33歳	女性	13年	E	43	女性	23年	29年
C	40歳	女性	21年	F	51	女性	29年	31年

＊美容師は美容師国家資格を取得以前より、美容院に就職し洗髪を顧客に行っているため、美容師国家試験取得以前の洗髪経験の状況を「顧客への洗髪経験」として記載する。

2) 面接日程と実施場所

看護師と美容師には、事前に勤務や体調に支障のない日程を確認し調整した。看護師 3 名は A 大学の実習室で実施し、美容師はそれぞれが勤務する美容院で行った。看護師と美容師は洗髪槽とリクライニング式洗髪椅子を用いた。

3) 洗髪実施

対象者は、研究者 1 に対して洗髪を実施した。実施内容は、ケープ装着から洗髪終了後、毛髪が乾燥し、ケープをはずすまでとし①洗髪技術の洗髪準備、②予洗、③シャンプー（シャンプー剤をつけ実施し洗い流すまで）、④リンス（リンスもしくはトリートメント剤をつけ実施し、洗い流すまで）、⑤乾燥（ケープを外しドライヤー乾燥まで）の 5 段階のプロセスとした。その間、ビデオカメラ 3 台で撮影した。

4) ビデオカメラ設置場所

3 台のビデオカメラの設置場所は、対象者の手の動きが見えるように研究者 2 が、1 台のビデオカメラで手元を撮影した。2 台目は対象者が立った側、3 台目はその反対側に設置した。それら 2 台のビデオカメラは対象者の立ち位置や姿勢、対象者と患者の距離がわかるように三脚を用い定点に設置し、撮影した。

5) 半構成的面接の実施

ビデオ撮影した後、対象者にそのビデオの映像を見せながら、洗髪の実施方法の説明をおこなってもらった。その都度、ビデオを止めながらこだわりや留意点などを中

心に自由に語ってもらった。面接内容は、洗髪を行う場合、特にこだわって実施していること、注意しおこなっていること、洗髪をおこなう上で大切にしていることについてインタビューガイドに従って面接を行った。その際、許可を得て音声を録音し、面接実施時間は 1 時間程度であった。頭部前方と後方と顔面の図を準備し、言葉で説明できない部分などはその図で示しながら語ってもらった。

4. データ分析方法

看護師、美容師それぞれ 3 名のインタビューの結果を逐語録とし、洗髪のプロセスを整理した。

半構成的面接で得られた逐語記録の分析は、フリーソフト KH Coder^{12, 13, 14)}を用い、テキストマイニング手法で分析した。

III. 倫理的配慮

事前に施設責任者や事業主には承諾を得た。対象者には研究目的、方法などについて説明し、研究への参加については任意であり、研究実施時においても辞退することが可能であることを伝えた。A 大学・A 病院の倫理審査委員会において審査を受け、承認を得た後に研究を実施した。

表2 看護師と美容師の洗髪実施の根拠（一部抜粋）

看護師	美容師
・あの目を隠したのは、こう目と目が合うとなんかちょっとこうやりにくいかなというのもある、 ・美容院で目、こう顔を隠されるじゃないですか。で、ちょっとこう安心感というか、そういうのもあるので、でちょっと目を隠しました。 ・ケープを先にひいて一、患者さんの負担にならないように、脳外の人なのであんまり頭上げたり下げたりとか、そういうことができやんもんで、先に準備を整えといてから、そこへこう、ひょいって寝てもらおうような感じで、いつもしてます。 ・この部分を全体に使うとえーと、なんて言うかな地肌に当たったときのあの圧力の加減が一か所に固まらないので、それで全体に手背の第一、第二関節を全部使って、第二関節を全部使って ・リンスは、うんと一ちょっと気分を安定させるような感じのつもりで ・ちょっとツボはよく詳しくはわかりませんが、自分なりの方法でツボを刺激するような感じで、自分の気持ちのいいところ、で一指の腹をつかって、親指の腹を使って	・ここの手首のこちらのほうが、皮膚が薄いのでお湯の温度は必ずここのところで温度調節してから ・一回目のシャンプーは汚れ、皮脂とかいろんな整髪剤が付いているので、泡が立たなくて当たり前 ・シャワーマッサージというのですが、耳周りをホールドしながらシャワーマッサージしてあげると、あの一お客様はほとんどの方は眠くなるという作用があると。リラクゼーション効果があるんですね。 ・シャンプー剤が残ってしまうと、あのかゆみとか炎症とか湿疹が出来ますので、これでもかかっていうぐらいゆすぐのが一番ですね。やっぱり傷んでるのは手取りが悪いので。やっぱりちょっとゆるくなったりとか、ストロークをゆっくりめに動かしたりとか、っていうのも考えてますね。 ・あの一蒸しタオルとか、長時間寝てることによって首つてのは、結構負担になってますので、まあちょっと熱めのお湯で。あの一温めてあげて、首元に少しあてて、まあ喜んでいただけることが多い ・ブラッシングは地肌の汚れを浮き上がらせるためにしています。 ・シャワーの音自体も実際、思ってる以上に耳元であるとうるさいものなので、まあ手があいてるときで水をためるときなんかはなるべく水の中にシャワーの先端をいれて水音を出さずにとかいうこともやってます。

IV. 結 果

1. 看護師と美容師の説明方法の比較

1) 洗髪の実施方法

看護師と美容師の技術がどのような特徴や相違があるのか比較した。看護師は、研究者1の頭部がゆれないこと、耳に水が入らないこと、患者の状態に注意をはらいながらおこなっていた。洗髪の方法は、生え際ギリギリまで洗うことや後頭部などを洗い流すことを困難な技術であるとし、時間短縮のために省略して行う場合もあった。また、看護師は美容師のように洗うことができないと語っていた。洗髪方法について、美容師に質問し、そのことを練習し技術を高める努力をしていた看護師もいた。看護師が困難であると語った生え際や後頭部は、美容師も同様に難しい部分であると認識しており、それらの部分をどのように洗髪するのか、さらに具体的に説明することができていた。また、美容師は一回目と二回目のシャンプーをカットやカラーリングを行うための準備とし、分けて洗浄剤や方法を変化させていた。頭部を第1, 2, 3線、フェイスライン、サイド、ネイブ（後頸部）など各部分の特徴を考慮した方法で、シャンプーやリンス、シャワー

ヘッドのあて方について説明をおこなっていた。また、1, 2, 3, 4とリズムをつけたり、シャワーヘッドを1周, 2周とまわしたりするなど数字を用いて説明を行っていた。

2) 洗髪方法の根拠説明

看護師と美容師は洗髪の実施内容の根拠について説明していた。看護師、美容師は、それぞれの根拠において、看護師は20項目（延べ回数）、美容師73項目（延べ回数）であった。それぞれの内訳について、看護師Aは3項目、看護師Bは10項目、Cは7項目であった。例えば、「両手で洗うと頭が揺れるため、片方の手で頭を支えながら片方の手で洗う。」「起き上がる際、水分が垂れやすいため、生え際を細かくふきとり、タオルを巻いて起き上がる。」などであった。一方、美容師の根拠の説明について、美容師Dは22項目、美容師Eは23項目、美容師Fは28項目であった。例えば、「シャワーの音は、思っている以上に耳元であるとうるさいので、手があいているときで水をためるときは、水の中にシャワーの先端をいれて水音を出さないようにしている。」「ゆすぎによって90%位の汚れが落ちるといわれているのでしっかりと最初に流す。」などであった。

表 3 看護師、美容師が用いる擬音語、擬態語

看護師〔A, B, C〕	美容師〔D, E, F〕
〔A〕 ・髪全体を濡らそうと思ってまあ<u>ジャー</u>っとかけて ・こう手で<u>パチャパチャパチャ</u>と ・湯を<u>パチャパチャパチャ</u>とやる ・両手で<u>ガア</u>ーッと洗うと頭が揺れてしまう ・片方の手で<u>パチャパチャ</u>てこうやって ・シャンプーほど<u>ゴシゴシ</u>しなくてもいいかな ・という感じで<u>サラ</u>ッとつける ・<u>タブタブ</u>とこう回復しとる 〔B〕 ・<u>ヒョイ</u>ッと寝てもらいような感じ ・<u>ゴロゴロ</u>なんべんもできやん ・短いところを<u>キュキュキュ</u>ッと洗いながら ・本当は豪快に<u>ジャア</u>ーッと 〔C〕 ・片手で<u>サー</u>ッと全体に片手で<u>サー</u>ッと	〔D〕 ・シャワーを回すように、<u>グルグル</u>ッという感じ ・こういう風に<u>ジグザグ</u>で入っていきます ・洗剤ではやっぱり<u>ガシガシ</u>になる ・これはもう本当に<u>サッ</u>と ・<u>ベタ</u>ッととれていない 〔E〕 ・一枚にし、<u>クッ</u>とかける (・後ろは前に<u>クッ</u>とだして) ・もう手をこう、<u>ブラブラ</u>ーッとした感じ ・手のひらの<u>フックラ</u>したところに ・リンパの流れ...こう、上に<u>グー</u>ッと上がり ・包んでお湯をためながら<u>タブタブ</u>とお湯で ・まっすぐになったときに<u>ポッ</u>と ・目を閉じている時に<u>パッ</u>とこう 〔F〕 ・<u>バー</u>ッと耳の中に ・地肌に<u>ベタ</u>くっついて (美容師Dと同様) ・<u>バー</u>って顔に毛が飛んでくる ・顔に<u>パタパタパタ</u>ッてあたる

表 4 看護師と美容師の総出語数と異なり語数

看護師	総出語数 (延べ数)	異なり語数	美容師	総出語数 (延べ数)	異なり語数
A	879	220	D	2,632	494
B	1,137	278	E	1,622	370
C	1,137	297	F	2,936	443
ABC合計	3,153	546	DEF合計	7,190	868

異なり語数は、同じ単語が再度出現した場合カウントしないため、看護師、美容師それぞれの語数の合計は一致しない。

3) 看護師、美容師が用いる擬音語、擬態語

看護師と美容師は洗髪を説明する場合、擬音語や擬態語を用いていた。看護師は「ジャー、パチャパチャ、ガアーツ、ゴシゴシ、ゴロゴロ、キュッキュッキュッ」など 12 種類、美容師は「ぐるぐる、ジグザグ、サッ、ベタッ、クッ、フックラ、バーッ」など 16 種類であった。看護師 A は 8 種類、看護師 B は 4 種類、看護師 C は 1 種類であった。美容師 D は 5 種類、美容師 E は 8 種類、美容師 F は 4 種類であった。

2. KH Coder の分析結果

1) 看護師と美容師の総抽出語数と異なり語数の比較

看護師と美容師の洗髪プロセスの逐語記録を KH Coder で分析し、その結果の総抽出語数と異なり語数を抽出した。総抽出語数とは、分析対象ファイルに含まれるすべての語の延べ数であり、異なり語数とは、何種類の語が含まれているかを示す数値である¹⁵⁾。

看護師が洗髪を説明するときに用いた総抽出語数は 3,153 語であり、異なり語数は 546 語であった。一方、美容師の総抽出語数は 7,190 語、異なり語数は 868 語であった。看護師と美容師各 3 名の総抽出語数と異なり語数

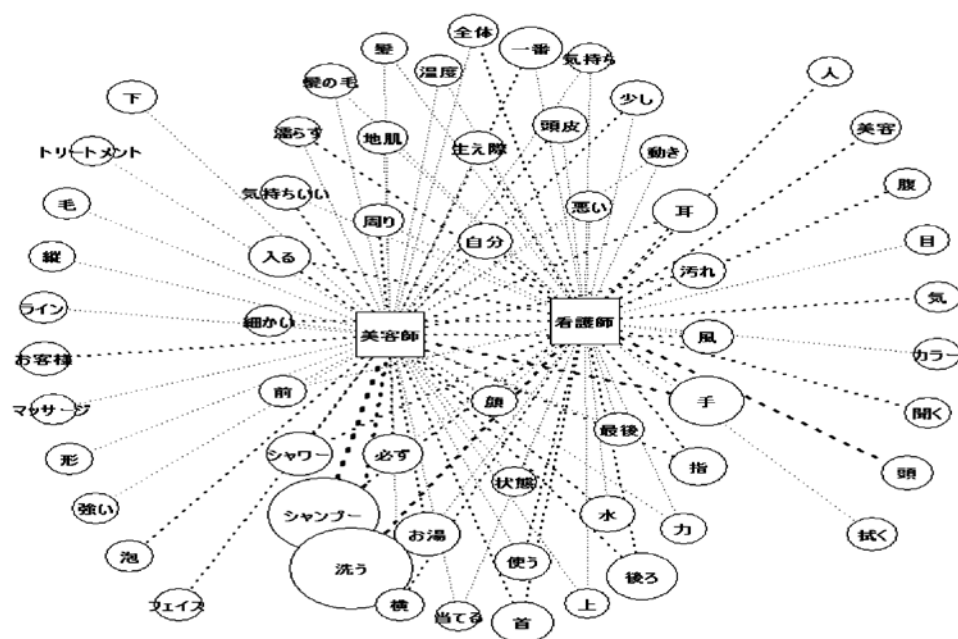


図1 看護師と美容師の共起ネットワーク

を看護師経験年数別に表4にまとめた。

2) 看護師と美容師の共起ネットワーク

看護師と美容師との洗髪方法の比較を行った。看護師と美容師が洗髪方法の説明に用いた語の関連性や違いをみるために、共起関係の描画数を70とし共起ネットワークを示した。(図1) 共起ネットワークは、関連が特に強い単語同士を線で結んだものである。

看護師と美容師の共通する語、看護師が主に使用する語、美容師が主に使用する語の3群に分かれた。共通する語で強い共起関係があるのは「洗う」「シャンプー」「手」「後ろ」「耳」「首」「生え際」などの40語であった。言葉としては共通であるが、それぞれが意味する内容には相違があった。「シャンプー」について看護師は、患者の頭皮の汚れの程度によってシャンプーの回数を増やすことについて説明されていたが、美容師はシャンプーを2回行うため、1回目、2回目のシャンプー剤の量や組成について説明していた。「耳」「後ろ」「生え際」は美容師、看護師ともに洗い難い部分であるとしているが、看護師はどのようにするのか迷いがあった。一方、美容師は耳の周囲や後頭部の洗い方の具体的な方法を説明

していた。

看護師が使用する語は「人」「美容」「腹」「目」「気」「カラー」「聞く」「頭」「拭く」の9語あった。「人」は患者、「美容」は美容院、美容師、「カラー」は頸椎カラーを意味していた。「気」の後には、[つける]、[つかう]、「頭」は[ゆれないように][がゆれる]などが続いていた。「聞く」は[患者]、「拭く」は[耳の後ろ]、[水がおちないように]などの語が前にあった。

美容師は「下」「トリートメント」「毛」「縦」「ライン」「お客様」「マッサージ」「形」「強い」「泡」「フェイス」の11語であった。「下」の前には[シャワー]、「強い」は[水圧][力加減]、「泡」は[細かい][しっかりした]などであった。「フェイス」「ライン」は[フェイスライン]であり、その語の後には[から天辺に向って][のほうに流す]であった。

V. 考 察

1. 看護師と美容師の洗髪技術の比較

1) 洗髪方法の根拠を説明すること

洗髪のプロセスを説明する際、看護師も美容師も根拠を加え説明していたが、美容師は看護師より3倍以上も多くの根拠を添えて説明していた。技術教育を行う上で根拠を説明することについて、様々な職場で技術・技能研究を行ってきた森¹⁶⁾も、根拠の説明は重要なことであるとし、訓練の段階別に説明している。訓練初期の修得方法は、基本的なことの単なる繰り返しだけではなく、科学的な説明を行い、理解させようとおこなうことの必要性について述べている。昨今の看護系大学や専門学校における看護の技術修得は、科学的な根拠をもとに行われている。研究対象者は、そのような教育背景のある看護師であったが、美容師に比べ、異なる語彙や根拠を用いて説明する回数が少ないことが明らかとなった。その他、頭部を球体にたとえ、湯をかけるシャワーヘッドの向きや強さについて、美容師は看護師より具体的に説明することができていた。しかし、美容師が説明する根拠には、頭頂部分の「ゴールデンポイント」と呼ばれる鈍感な部分をやや強めにマッサージすることの有用性について説明していたが、実際には、このポイントの名称やその部分が鈍感であることを明確に示す資料はなかった。ゴールデンポイントは経験的な感覚だけでそのようなマッサージが行われている可能性があり、根拠を明確にする必要があることが明らかとなった。

2) リズム・テンポを活用することへの可能性

美容師は1, 2, 3, 4とリズムを取りながら行うこと、1周, 2周とシャワーを回すなどリズムカルに行うことにこだわりながら実施していた。人は体験的にリズムカルに行う、つまりテンポの変化により心地よいと感ずる場合とそうでない場合とがある。美容師は意識的に手の動きの速さを調節してリズムカル、テンポよく行われていることが明らかとなった。

武中ら¹⁷⁾は、テンポを操作することにより気分が変化

することをもとに、気分や同期現象について、さらに、被験者の精神テンポおよび音楽の嗜好との関連性について生理的および心理的影響を調べている。心拍数にあわせたテンポや精神的テンポよりもやや遅いテンポが、リラックスし、副交感神経優位の状態をもたらすことを明らかにしている。これらの結果より、患者をリラックスさせ副交感神経を優位にさせる手指のリズミカルな動きなどの速さに注目し、その効果も合わせて検討していく必要があった。しかし、患者は疾患を伴い様々な心身の状態にあるため、一律ではなく個々にあわせたテンポを検討していくことが課題となった。

3) 看護師と美容師の言葉と技術

看護師と美容師の洗髪プロセスで用いた言語や実施方法について比較を行った。

洗髪の5プロセスは①洗髪技術の洗髪準備、②予洗、③シャンプー（シャンプー剤をつけ実施し洗い流すまで）、④リンス（リンスもしくはトリートメント剤をつけ実施し、洗い流すまで）、⑤乾燥（ケープを外しドライヤー乾燥まで）に大きな相違はなかった。

それぞれのプロセスの中で、美容師は一回目、二回目のシャンプーとして洗髪はカットやカラーリングを行うための準備として行い、その使い分けなど細かくおこなわれていた。また、第1線、2線、3線と頭部を各ブロックにわけ洗い残しがないようにおこなわれていた。看護のテキストでは、洗髪での頭皮の洗い方として生え際、生え際から頭頂部に向かって、後頭部とわけZもしくはNの字を描きながら実施する^{18,19)}と説明されている。しかし、看護師は動かし方や順序ではなく、生え際いっぱいまであらうことや患者の頭部をゆらさないことは説明していたが、具体的な方法の説明はなかった。看護師は、患者の状態を確認しながら、頭部を揺らさないように、水が背部に流れないようにしながら実施していることがわかったが、後頭部や耳の後ろや周囲、生え際などの技術については自信がもてず、美容師のようにできればよいと考えていた。一方、美容師は、シャンプーの組成や泡の立て方、お客様に洗うときには手の動かす方向、シャワーヘッドの向き、水圧、湯の流れの方向、力加減を考

え、マッサージなど取り入れ洗髪をおこなっていることについて具体的に説明していた。

看護師の知識・技術教育は、知識として科学的な根拠を学んだ上で、臨地実習につなげており、実習中も患者に実践する機会も多い。このように、知識、技術ともに修得した後に看護師となる。本研究の結果より、看護師が、洗髪の具体的な方法や根拠について十分に説明できなかった理由として、臨床現場では生活援助技術よりも診療援助技術への修得に重きがおかれているのではないかと考える。そのため、洗髪技術を次の世代に伝えるという意識的な行動が、臨床現場で十分にとられていない可能性があり、病院や施設内での生活援助技術の研修や指導について現状把握する必要がある。

洗髪で看護師、美容師の両者が難しい部分であると認識していたのは、「後ろ」「耳」「生え際」と共通していた。これらの部分が適切に実施できない場合、湯が背部に入ったり、顔に流れたり、シャンプーの洗い残しができることにより、患者や顧客に対して非常に不快感を与えたり、皮膚炎などを引き起こすことになる。これらの部分が洗髪にとって要となるため、技術の指導の際には実施方法を理解しやすい言葉を用いて表現する必要がある。また、洗髪のデモンストレーションの際には、後頭部、耳の後ろなど頭部により死角となるため、細かな手の動きがわかるように、言葉での説明に加え、視覚的にも工夫していく必要がある。

2. 技術指導の用語とするオノマトペ活用への可能性

看護師と美容師は洗髪のプロセスについて説明する時に、「パチャ、パチャ」「キュッキュッキュ」「クツ」「フックラ」など12～16種類の擬音語や擬態語を活用していた。これら、擬音語と擬態語をあらわす言葉として、語源をフランス語とするオノマトペがある。擬音語は実際の音をまねて言葉とした語で「さらさら」「ざあざあ」などであり、擬態語は視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象を言葉で表現した語で「にやにや」「ふらふら」などがある²⁰⁾。オノマトペは、通常表現できない感覚的な印象を言葉に表すことから複雑な内容や微妙な動きなども柔軟に表現できると言

われている²¹⁾。

中井ら²²⁾や三井ら²³⁾は看護技術の効果的なデモンストレーションにおいて学習者が「動作がイメージできる言葉」、「印象に残る言葉」について検討している。その中で、「クルクル」「スッ」「ふわふわ」など擬態語は、動作をイメージさせるため、意図的に用いることの必要性について示唆していた。その他、スポーツの分野において、運動のコツを伝える手段として、スポーツオノマトペの有効性についても検証されていた²⁴⁾。洗髪技術は看護師の身体を用いて実践するという点において、スポーツオノマトペとの共通性があり活用可能であると言える。看護では看護技術とオノマトペについての研究は少なく、今後、看護の技術教育のなかにも擬音語や擬態語の効果的な活用方法について示唆を得ることができた。

3. 看護と美容の洗髪方法の技術伝達の可能性

森¹⁶⁾は、技は言葉に表せないが、顔の表情や手や手指などの動きと併用する事で伝えられない部分を補うことが可能であり、抽象的な部分を具体的な技術として示することができるため、技術を伝承可能な形にすることができる²⁵⁾と述べている。看護師や美容師は看護学生や見習いの美容師、また新人看護師たちに、目の前で身体の動きや手指の動きをみせながら言葉を使って指導することが多く、その時が技術を伝承する機会となる。そこで、多くの根拠や言語、また、リズム・テンポやオノマトペなど効果的な活用方法を具体的に示し、説明できる能力を培う必要がある。しかし、看護師の洗髪技術は美容師と同様ではなく、看護師の対象は患者であることを考慮しながら、その疾患や状況に応じた援助を提供することが重要であることも強調する必要がある。

美容師の洗髪は、健康な人を対象としているため、特に心地よさやリラクゼーションに配慮された技術である。看護においては洗髪は、患者の健康レベルに応じた個別性のある技術とすることが重要である。看護は病院、施設、在宅など様々な対象や状況で対応していくことが求められており、患者の安楽性に関しては、美容師の洗髪を参考にすることにより、看護の幅を広げることにもつな

がと考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会．看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>., 2007.
- 2) 川島みどり：看護の技術と教育 看護の時代 3, 勁草書房, 東京, 44-46, 2006.
- 3) 小玉香津子, 坪井良子, 中村ヒサ (編)：頭髪の保清. 看護必携シリーズ 第1巻 看護技術 I, 学習研究社, 東京, 474-478, 2003.
- 4) 深井喜代子, 前田ひとみ：清潔を保つ. 基礎看護学テキスト EBN 志向の看護実践, 東京：南江堂. 218-233, 2008.
- 5) 島田多佳子：生活行動援助技術としての洗髪に関する文献研究と今後の課題. 慶應義塾看護短期大学紀要, 9, 1-13, 1999.
- 6) 本多容子, 緒方巧：基礎看護技術「洗髪」におけるすすぎの研究—効率的なすすぎ方法の検討— (第2報). 武蔵野学院紀要, 19, 90-96, 2005.
- 7) 宮崎貴子, 真島久美子：洗髪援助技術習得のための技術チェックを用いた看護技術教育の効果. 愛仁会医学研究誌, 46, 226-230, 2015.
- 8) 乙重洋子, 岩間百香合, 西口恵子, 他：看護婦と美容師の洗髪時の作業姿勢の比較. 日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要, 3, 10-21, 1988.
- 9) 原田真紀, 菊池真, 半澤裕美, 他：基礎看護技術の洗髪における心地よさを追求した演習効果—美容師と看護師の洗髪を比較して得られた学生の学びより—. 日本看護学学校協議会学会収録, 20, 70-71, 2008.
- 10) 佐藤晶, 坂田五月, 野村志保子, 石塚淳子：洗髪手技の違いによる生体反応・主観的反応の比較. 日本看護学会誌, 12(1), 50-59, 2003.
- 11) 社団法人日本理容美容教育センター：シャンプーイング. 美容技術理論 1, 東京, 29-55, 2009.
- 12) 樋口耕一：KH Coder, <http://khc.sourceforge.net/>.
- 13) 樋口耕一：KH Coder チュートリアル 漱石「こころ」を題材に. <http://www.slideshare.net/khcoder/kh-coder-28776074>, 2013.
- 14) 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—『理論と方法』, 19(1), 101-115, 2004.
- 15) 藤井美和, 小杉考司, 李政元：テキストマイニングで広がる福祉・心理・看護研究の世界. 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門, 中央法規, 東京, 8-11, 2005.
- 16) 森和夫：技を伝えるには, 技の学び方教え方, 中央職業能力開発協会, 東京, 139, 126-135, 2002.
- 17) 武中美佳子, 岡井沙智子, 小原依子, 他：心拍を基準としたテンポのリズム聴取による生理反応に関する研究. 臨床教育心理学研究, 31(1), 43-55, 2005.
- 18) 三上れつ, 小松万喜子：洗髪・拭髪. 演習・実習に役立つ基礎看護技術 根拠に基づいた実践をめざして, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 147-149, 2015.
- 19) 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕他：清潔の援助方法. ナーシング・グラフィカ基礎看護学③基礎看護学, メディカ出版, 大阪, 250-251, 2017.
- 20) 新村出, 新村猛 (編著)：広辞苑 第5版 岩波書店, 東京, 1998.
- 21) 田守育啓：オノマトペ—音韻形態と語彙性, 神戸商科大学経済研究所, 人文論集, 19, 63-85, 1983.
- 22) 中井三智子, 大津廣子, 中村美起, 他：看護技術の動作がイメージできる言葉. 日本看護研究学会雑誌, 39(3), 174, 2016.
- 23) 三井弘子, 大津廣子, 中井三智子, 他：看護技術の動作がイメージできる言葉. 日本看護研究学会雑誌, 39(3), 175, 2016.
- 24) 吉川政夫：スポーツにおける日言語的コミュニケーション スポーツ指導とオノマトペ, 体育の科学, 60(9), 613-618, 2010.

A Comparison of Verbal Expressions used by Nurses and Hairdressers to Technically Explain Their Shampooing Techniques

Sayuri MINODA¹⁾ , Sachiko TAKAUE²⁾ , Takako TANAKA³⁾ , Maiko OIKAWA⁴⁾

1) Suzuka University of Medical Science

2) Sugiyama Jogakuen University

3) Yokkaichi Municipal Hospital

4) Yamano College of Aesthetics

Key words: Nurses, Hairdressers, Shampooing, Technically Explain, Verbal Expressions, KHCoder